

短歌表現（IX） —コミュニケーション技術における学習効果の検討—

土 永 典 明

Tanka Practice（IX）: Composing poems of daily life and nursing care

Noriaki Tsuchinaga

はじめに

阪神淡路大震災の発生から23年が経過した。震災当日の早朝、筆者は急激な縦揺れに驚いて目を覚ました。家族の無事な姿に安堵したが、揺れが収まった後も恐怖で筆者の体がしばらく硬直した。ライフラインが途絶え、やっとのことで電気が復旧してテレビから流された画像に筆者は愕然とした。この地震は兵庫県を中心に、大阪府や京都府にも大きな被害をもたらした。道路は寸断され、街には全壊、半壊した家屋が立ち並ぶ。避難所には、多くの人々が集まる。震災当日、筆者は日本社会福祉士会の一員として宝塚市役所で、市職員に協力し地域住民の安否確認をおこなった。街では、家々が潰れ傾き電柱が斜めになっていた。初動対応の遅れが指摘され、危機管理体制の強化が課題となった。

俳人である長谷川權は、東日本大震災直後から、短歌を詠んでいる。それは、「やむにやまれぬ思い」で次々にわき上がってきた短歌を纏めた「震災歌集」の一つともいえるべきものである。地震と津波に苦しむ東日本の様子がメディアに流れた。人々が悲しみや苦しみに負けることなく生きていこうとする姿勢に痛感した。その声は、たとえつぶやくようなものであっても、筆者の心にはしみてくるものが感じられる。このようなとき、歌いたいことが心の中にはひしめきながら、どのようにまとめて良いのかわからないという悩みが生じる。その悩みは、時間がたつと忘れてしまう。

最初の準備運動としての作歌法は、5・7・5の上の句で風景を述べて、7・7の下の句で自分の気持ちを述べることで一応の形が出来上がる。短歌を作ろうと思えば、その人の生活そのものに張りが出てくるものである。

I 短歌の作り方

短歌を詠むことのすべては観察するところからはじまる。観察したことを、自分の言葉で書き著わしてみる、そこで初めてその短歌は、自分のものになる。短歌を作ることには、自己発見の喜びという効用がある。案外、自分のことはわからないものである。しかし、言葉にし、歌に詠んでみることで、後から気が付くものがある。思いがけず本心が出ているということもある。短歌は感情を述べるものであ

り、事柄を報告するものではない。それが短歌の基本的性格である。しかし、その感情を述べるために、短歌では、その感情そのものではなく、ことがらを通して表現するしかない。

現実そのものを捉えるのは、簡単なようで、実際には難しいものである。それは我々がそれほどこの日常生活の身辺や自分のことを、つきつめてみてはいないからである。本当のことを歌うということに価値観があるのではなく、本当のことを歌うことで何かが見えてくる、そのことが重要である。短歌を詠むということは自分を見つめることにつながる。

短歌は内容を伝えるだけでなく、情感や余韻や音、リズムをも楽しむものである。そのため、短歌を詠む中では、すべてを言いきらないということも必要である。できるだけシンプルにして、リズムや言葉の音感を大事にすることも求められる。そして、短歌では目にしたことのほかにもう一つ何かを見つけ出す。そして見たことのほかに感じたことをつけたしていく。さらに、短歌では、心に何かの気持ちがいっぱいに溢れたときにそれをまとめる。作歌は日常を注意深く見つめることに繋がってくると筆者は考える。これらは短歌をまとめるうえで大事な事柄である。そのためには、普段から繰り返しおこなわれることでも、注意深く見つめる習慣を身につけなければならない。さらに、多くの短歌を詠むことで、自然に表現力が身につく、上達していく。さらに、詠んだ歌をしばらくたった頃に見直して詠み直してみると、新たな発見も多い。そのことは、表現力の向上につながる。また、短歌を詠もうと思うためには、日頃から著書に親しみ、語彙を豊かにしたり、自然や草花などに積極的に触れ、感性を磨くことも大切である。

短歌はひとつの情景について一首作ってしまったからといって、それで終わりではない。一見した印象だけでは、他の人も同じようなことを考えていると感ずることが多いのである。よく観察をして、デッサンをするような訓練をしていると、一つの対象をいくつもの角度から捉えることができる。同じ題材を歌ったとしても、当たり前な角度か、新しい切り口か、というのは作品の価値を大きく左右するのである。大きなテーマのとき、あるいは一つの素材でさまざまな角度から歌うとき、連作という方法がある。短歌は三十一音という制限があるため、一首に盛り込むのは限度がある。

多くの歌に触れることは、学生の感性を磨く上で大切なことである。授業の中ではなぜ作者は様々な表現方法の中で「短歌」という形式を選択したのかを考えさせるようにしている。それにより短歌がもつ特徴や魅力、5・7・5・7・7のリズムの味わいを学生が理解できるのではないかと筆者は考える。

Ⅱ 短歌の基本を推敲

文章を書くときの書き言葉が「文語」というのに対して、日常話すときに用いる言葉を「口語」という。本来短歌は文語によって表現されてきたものである。しかし、ここ数年、話し言葉である「口語」を取り入れた短歌が登場してきている。短歌を詠む際に口語で詠むと柔らかく親しみやすい印象が、文語で詠むとかしこまった印象の歌になる。ただし、口語と文語を混ぜて詠むと、歌のイメージが不揃いなものになってしまうので、避けたほうがよい。口語と文語を混ぜて詠むことの問題点は、文語で過去を表わす助動詞「けり」「つ」「ぬ」「たり」「り」などが、口語ではすべて「た」の一言で表現される。つまり、文語で表現できた微妙な違いが、口語では表現できないということである。

そして漢字表記が多すぎると窮屈になる。また漢字表記では、歌全体の見た目を短くしてしまう。平仮名表記の多さは間延びがしたような不自然さを感じられる。このように同じ短歌でも表記の仕方ひとつでまったく違った印象になる。詠み手がリズムについて、あれこれと推敲し考え抜いた結果短歌は完成するのである。

さらに、自分自身の歌について多くの人から意見を聞くことは勉強になる。上達するには、自分の作った短歌を読み返して、気に入らないところは何度でも根気よく直すようにする。書いたときに、よくまとまったと思っても、数日が過ぎると、気に入らないところがずいぶん出てくるものである。直すには次のことが考えられる。

短歌を詠んだ時には、その表現が気持ちよく表している言葉かどうかを考えて、選び直しを行う。又、その時、言葉の言い方や使い方を工夫してみる。そして言葉の順序を入かえて、気持ちが強く読む人に伝わるように工夫することが求められる。短歌は詠んだままにせず、何度も見つめ直し、まず自分自身で推敲してみることが必要である。推敲するときのポイントとしては、リズムや表記とともに文法的な誤りはないかの確認も必要である。その歌が自分の表現したいことを適切に表現できているのかを、客観的に見直すことも大切である。作歌においては、推敲に終わりはないという気持ちで、自分自身の歌を何度も見つめ直すことが肝要である。

Ⅲ 短歌でつづる学生の日常生活

1) 介護実習

- 初めての介護実習緊張で何もできずにただ見てるだけ
(講評) 初めての实習で何をしたらいいのかわからず、職員がしていることをただ見ていた。
- 利用者が些細なことで「ありがとう」私のほうこそ感謝一杯
(講評) 実習生の自分に対して、手際が悪くても優しく接してくれた利用者であった。詠み手である筆者の方が、逆に利用者に助けられていると感じた。
- 普段から褒められることはないけれど施設に行けばアイドル気分
(講評) 普段の筆者はいつも友達からいじられて、褒められることは少ない。しかし、介護実習に行くと利用者から、「可愛い」とか「綺麗だ」などと褒められ、アイドルにでもなった気持ちを詠んだ作者であった。
- トランプをしようとみんなを誘ってた本人すぐにお風呂の時間
(講評) 利用者が同室の人たちをトランプに誘ったが、すぐに入浴に行ってしまった。
- 最後の日104歳の利用者に手を握られて別れを惜しむ
(講評) 実習最終日に、施設で最高齢の利用者の方に手を握られ、別れが辛くなった作者であった。
- 「ありがとう」何をしても感謝されやりがい感じる介護の仕事
(講評) 些細なことでも感謝して下さる利用者の方。辛い事もあった実習であったが、この仕事に生き甲斐を感じた作者であった。
- 利用者のお宅訪問緊張し身動き取れず沈黙続く
(講評) 職員の訪問介護員が、利用者宅で掃除をしている時に、人の家ということもあり、実習で来ているのに何もできなかった。また利用者とは初対面なので、声もなかなかかけることが出来なかった作者であった。
- 白い服桃色の服若い人最後に名前覚えてくれた
(講評) 利用者が作者の名前をなかなか覚えてくれず、着ているユニフォームの色で呼ばれていた。しかし、実習の最後には作者の名前を呼んでくれた。その喜びを詠んだ歌。
- 「美味しいよ」饅頭分けてくれた手は他の誰より温かかった
(講評) 認知症の利用者で、作者が隣に座って話をしていたら、「美味しいものをあげる」と饅頭を

半分に割ってもらった。その時の利用者の手に、温か味を感じた作者であった。

- 「ちょっと来て」椅子に座って面接を会社勤めの癖がぬけない
(講評) 利用者に「メモとペンはないか?」と聞かれ、それらを手渡すと、次には名前や学校を聞かれ面接が始まった。質問が終わると、「あなたは合格だ!」と言われた作者であった。
- 「帰りたい」フロアで話す利用者と手をつなぎゆく秋の夕暮れ
(講評) 夕方に、決まって帰宅願望の強い利用者と、手をつないで施設のフロアを歩く作者であった。
- 「大丈夫?」今も昔もお医者様施設のあちこち巡回中
(講評) 昔に医師をしていた男性利用者が、今も職員や他利用者のところに出向き、医師としての声かけをしていた。
- 利用者を思う心が大事だと胸に刻んだ指導者の教え
(講評) 実習時の最終反省会の際に、実習指導者の方にこのように言われ、聞き入った作者であった。
- 利用者が話す懐かし新潟弁実習終わり祖母に会いたい
(講評) 実習中に利用者の方と喋っていると、祖母と同じ新潟の訛りであった。暫く会っていない祖母に急に会いたくなった作者であった。

2) 日常生活

- 真夏でも元気に働くお祖父ちゃん朝から体操健康週間
(講評) 今年は特に暑さが厳しい。しかし、作者の祖父は体操してから、多くの仕事をこなしている。
- 友達がずっと一緒にいてくれてたくさんのこと乗り越えられた
(講評) 友達と一緒にいると、嬉しいことや楽しいことなどを分かち合える。支えられている気持ちになる作者であった。
- 何気なくカレンダー見て気がつけば時が流れて季節も変わり
(講評) 今までは、気にすることもなかった季節の移り変わり。カレンダーを通して、時の流れの早さに気付かされた作者であった。
- スマホ打つ大人の群れに背を向けた子どもの瞳に輝く世界
(講評) JRの座席に座り、スマホを打つ大人たち。少年はそんな大人に見向きもせず、大志を抱いた。
- 「バイトやる」言い続けてはや数ヶ月気づけば今年も後三ヶ月
(講評) アルバイトをやろうと思っていたが、なかなか実行に移せなかった作者であった。
- 夏の夜にひっそり咲いた月見草今宵も一人待ちぼうけかな
(講評) あ的那个人は、月見草が咲く頃にやってくると信じていたのに、今日も来ずに待ちぼうけの作者であった。
- そよ風に体を揺らす月見草つぼみが開く満月の夜
(講評) 夏の夜に、月見草が揺れながら咲く瞬間の場面を歌った。
- 文月の闇夜に紛れ現れるひと時だけの白き楽園
(講評) 7月の闇夜に紛れて姿を出した月見草。無数に咲き乱れるその場所は、まるで楽園にでもいるようであった。
- 月見草昼はピンク夜は白変化する花移り気な恋
(講評) 月見草は昼と夜とでは色が変化する。それはまるで、次から次にパートナーを替えていく、移り気が多い人のようでもある。

○雨上がり白くそびえる月見草露にうたれる一滴の涙

(講評) 雨の時期に、一輪の花が寂しそうに咲いていた。それはあたかも、作者の現在の気持ちと重なってきた。

○家に着き飛んでくるのはうちの犬いつものようにたくさん釣

(講評) 作者が帰宅したときに、勢いよく走って来てしっぽを振る愛犬。嬉しくて釣をたくさん与えた作者であった。

○現実と広がる夢は交差して光へ進む未来の自分

(講評) 経験と失敗を繰り返して、あるべき自分へ成長していく場面が描かれている。

○打ち明けてしまいたいとは思うけど伝えられない儂き思い

(講評) この気持ちをあなたに伝えたら、優しいあなたはきっと困ってしまうだろう。だからこの思いは、今だけのものにしておきたい。今後はきっと、時間が解決してくれると作者は思った。

○自転車川を眺める河川敷今日一日の始まり告げる

(講評) 作者は普段自転車通学をしている。朝の日を浴びてキラキラ輝いている川がとても綺麗で、これを見ると今日も頑張ろうという気持ちになった。

ま と め

筆者は、12年前に誰も知り合いのいない新潟市で単身赴任をした。筆者は、生まれてはじめて本当の一人ぼっちになった気持ちを体験した。心細さに負けそうになりながら、これから暮らす新潟市の街の灯りを私はじっと見つめていた。そのような折、筆者は本学の学生に対して授業で作歌指導をする機会があり、現在も継続している。短歌の授業では短歌についての基礎知識や表現技法を押さえ、31文字という定型を意識した指導をしている。筆者は学生の作歌指導をしていて、「この表現はよくわかるようになった」と痛感することがある。普段出会っている学生の姿であっても、ふとした拍子に遠くから見たとき、学生のその輪郭の思いがけない鋭さに筆者は胸を突かれることがある。それは誰かに見られていることを意識していない、むきだしの無表情な学生の輪郭である。あるいは、かすかな寂しさが浮き上がったりもしてくる。学生たちが詠んだ短歌は、語彙力や律調の点において、幼さはあるものの、素直に歌うべき対象をとらえている。

人間、忙しい毎日に流されている。しかし、見逃してしまうものがこの世界にはたくさん隠されていると筆者は感じる。それらに目を凝らして、耳を澄ませば今まで気にも留めていなかった景色にも物語があることに気づいたりするものである。風のおい、花の色、遠くから聞こえる鳥の声。季節は私たちに時の流れの美しさと残酷さを教えてくれる。今年の冬は「新潟の底冷え」が半端ではないことをつくづく思い知らされた。そして真冬の寒さに驚きながらも、同じ回復していく日の長さどこか安堵した。冬の空気は鼻の奥が痛くなるほど冷たくて、澄んでいて微かなものの匂いを際立たせる。自然は春夏秋冬を繰り返し冬の次には必ず春が訪れる。学生たちには、そのような季節の変化に敏感になってほしい。心の中でぼんやり見えたものでさえ、季節はやわらかく日々を横切っていくのである。

今後も学生への「コミュニケーション技術」の指導では作歌活動を通して、語彙力と豊かな感性を育む内容に取り組んでいきたい。

参考文献

- 1) 飯塚書店編集部 2007 短歌文法入門(新版). 飯塚書店.
- 2) 篠原資明 1996 心にひびく短詩の世界. 講談社現代新書.